



日本ラテンアメリカ学会 会 報



2022年11月30日

No. 139

1. 理事会報告
○第173回理事会
2. 第44回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ
3. 地域研究部会開催案内
4. 『ラテンアメリカ研究年報』第44号の原稿締切時期の変更について
5. 新刊書紹介
6. 事務局から

1. 理事会報告

○第173回理事会

日 時：2022年9月24日（土）

14:00～18:20

場 所：Zoomを使用したオンライン会議

出席者：石田、磯田、岩村、大越、奥田、上、岸川、久野、小池、後藤（書記）、近田、田村、北條、舂方、松尾、宮地、村上（理事長）

欠席者：浅香、宇佐見、本谷

〈報告事項〉

1. 事務局

舂方理事より、継続審議中の若手等研究者に対するキャリア支援の充実に関連して、関係理事・運営委員とワーキング・グループを結成し、6月20日に検討機会を持ったことが報告された。それに基づき、前回理事会後の

メール審議での了承事項として、各地域研究部会の開催回数・時期（従来どおり年2回、1回目を10月～11月頃、2回目を2月～3月頃に開催）、およびキャリア支援を目的とした「合同地域研究部会」を新たに開催する方向であることを確認した（キャリア支援に関する提案については審議事項へ）。

2. 会計

近田理事より、クラウド上に会計専用アカウントを作成し、今後はこのアカウントに会計関係の資料を蓄積して引き継いでゆく方針が示された。これに伴い、郵便振替票（紙媒体）については、会計報告後1年をめどに廃棄することとした。

3. 会報

後藤理事より、会報138号（2022年7月30日付）は旧担当（大串前理事）の責任編集において刊行されたことが報告された。また、次号139号（2022年11月20日以前刊行予定）の企画について別紙に基づき提案があり、了承された。

4. 研究年報

宮地理事より、研究年報第43号について現段階で投稿原稿が寄せられていないことが報告された。

5. 定期大会

松尾理事より、第44回定期大会（2023年、明治大学）の開催について、武田和久会員を委員長とする実行委員会を立ち上げ、大会企画理事とともに

鋭意準備を進めていること、日程は2023年6月3～4日、原則対面方式＋一部オンライン併用で実施する予定であること、会場として明治大学駿河台キャンパス・リバティタワーの一部を仮押さえしていることが報告された。また、大会ポータルサイトの準備状況についてデモ版を示しての説明があった。

6. 地域研究部会

田村理事より、東日本研究部会は12月3日（土）13:30よりオンライン開催の予定で、現時点では報告の申し込みがないことが報告された。

小池理事より、中部日本研究部会は11月19日（土）13:30～17:00にオンライン開催の予定で、現時点では報告の申し込みがないため、会員以外の報告企画も含めて検討中であることが報告された。

北條理事より、西日本研究部会は11月26日（土）14:00よりオンライン開催の予定で、1名の報告申し込みがあったが、キャリア支援の充実に関する審議事項（後述）に関わって別機会での報告に回ってもらうことも検討中であることが報告された。

7. ウェブサイト・ニュース配信

石田理事より、前回理事会以降（6月11日～9月23日）のウェブサイト更新・ニュース配信の作業の詳細について報告があった。また、石田理事の出産前後の業務困難が予想される時期については、後藤理事が担当業務を代行することが報告された。

8. 学術会議・国際交流

岸川理事より、若手支援制度に対する申し込みが現時点ではないことが報告された。

〈審議事項〉

1. 持ち回り審議の再確認

前回理事会後にメールによる持ち回り審議で了承した以下の3件について再確認した。

(1) 安保寛尚会員を西日本研究部会の運営委員とすることを了承した。

(2) 本学会も加盟するJCASA（地域研究学会連絡協議会）に対して国立国会図書館よりあったJCASAホームページ掲載情報の収集・保存・利用の要請について、これを承諾した。

(3) 第42回定期大会（横浜国立大学）において大会用に作成したポータルサイトの契約期限が8月31日に迫っていたが、制作会社（創文社）との契約更新はせず、代わりに、サイト内の全データを「画像保存」（手数料2,750円）することを了承した。当日のプログラム及び「要旨集」を大越理事がウェブサイト・ニュース配信担当理事に送付し、学会HPの同上定期大会の欄に紐付けることとした（その他のデータの活用方法は追って検討する）。

2. 入退会の承認

舩方理事より紹介・提案のあった、入会希望者1名、退会希望者3名の入退会をそれぞれ了承した。

3. 研究年報への投稿の原稿提出締切の変更

奥田理事より、研究年報への投稿の原稿提出締切を現行の12月中旬から9月末に前倒しで変更することが提案され、これを次々号44号（2024年刊行予定）から適用することを了承した。

4. 理事選挙施行細則

選挙管理委員会の内山委員長より提

言のあった理事選挙施行細則の文言や表記に関する見直しについて検討し、これまでの選挙管理委員会における慣例にあわせる形で、辞退要件に関わる部分を以下のように改訂することとした(9月24日付)。

(改訂前)

「……6ヵ月以上の国外滞在、本人の療養・入院、その他止むを得ない事由で辞退の申し出があり、これが公文書をもって証明し得る場合には、選挙管理委員会が理事として職務遂行が不可能・困難であると判断し、辞退を承認することもありうる」

(改訂後)

「……6ヵ月以上の国外滞在、本人の療養・入院、その他止むを得ない事由で辞退の申し出があり、選挙管理委員会が理事として職務遂行が不可能・困難であると判断した場合は、辞退を承認する。必要に応じ、公文書等によってその事由の証明を選挙管理委員会が求めることがある」

なお、同細則はこれまでウェブサイト上では公開してこなかったが、上記改訂を反映した全文を近日中に公開することとした。

5. 定期大会関連

第44回定期大会(2023年)の実行委員会より、学者や学生アルバイトに関わる支出について問い合わせがあったが、こうした項目も含め、定期大会経費から実行委員会の裁量で支出できることを確認した。

また、松尾理事より今後の定期大会における託児所の設置について提案があり、その設置・運用のあり方、支出を定期大会経費からとするか独立予算項目とするか等を議論したが、松尾理事を中心にさらに検討することとし

て、継続審議とした。また、定期大会に限らず地域研究部会報告時にも活用できる枠として、託児補助制度の新設についても会計の近田理事が検討することとし、これも継続審議とした。

さらに、定期大会終了後の各大会独自のポータルサイトについて、審議事項1.(3)の件にも鑑み、今後は業者委託ではなく実行委員会独自で作成することを基本とし、次回第44回定期大会でのポータルサイトの作成が今後のモデルとなるよう実行委員会に対して要請した。

6. 学会資料の今後の保存について

学会創設以来のさまざまな資料は歴代の理事長・事務局が引き継いできたが、保管に困難を来すようになってきたため、村上理事長より今後は電子化して保存することが提案され、これを了承した。残す資料の取捨選択、および保存方法とその経費については追って検討することとした。

7. キャリア支援について

若手等研究者を対象とするキャリア支援を具体化すべく、舛方理事より別紙に基づいて2点提案があった。

ひとつは、「キャリア支援セミナー」(仮称)の制定である。その運営は事務局および各地域研究部会が担当し、ラテン・アメリカ政経学会との共催も視野に入れつつ、報告事項1.にある「合同地域研究部会」を研究報告のための機会として、2023年については4月8日(土)に開催する案が示された。他の理事からは、支援の対象者を明確にすることなどを含め、さらなる制度の具体化が求められた。また、研究発表目的の海外旅費を補助する既存の「若手支援制度」との名称上の類似が指摘され、「若手支援制度」のほうの見直し

も含めてさらに検討することとした。

もうひとつは、「国際共同研究奨励費」の制定である。本会会員と国外の研究機関に所属する大学院生・若手研究者などのあいだでおこなわれるラテンアメリカに関する共同研究を促進することを目的として、1件あたり20万円から30万円、年間2件から3件に対して助成をすることが提案された。これに対しては、同じく「日本ラテンアメリカ学会優秀論文賞」の副賞（10万円）とのバランスや年間の予算額、選定方法などの問題が指摘され、この奨励費を使った研究計画のイメージに関して関係理事とさらに検討をすることが求められた。

最後に、次回理事会開催を2023年2月11日（土）14:30開始とすることを確認して散会した。

2. 第44回定期大会の開催と発表者募集のお知らせ

第44回定期大会は、2023年6月3日（土）および4日（日）の2日間、明治大学を主催校として開催します。現在のところ、JR御茶ノ水駅そばの駿河台キャンパスを会場とする対面開催を予定しています。ただし、新型コロナウイルス感染症の状況によっては全面オンライン化の可能性もありますことをご了承ください。基調講演では植民地期ラテンアメリカにおけるキリスト教布教ならびに先住民の文化変容の問題に精通する専門家をお招きし、シンポジウムではチリを出発点にラテンアメリカの半世紀とこれからを学際的な視点から展望する予定です。会員の皆さまの奮ってのご参加をお待ちしております。報告をご希望の方は、2023年1月14日（土）までに、第44回定期大会ポータルサイト（www.ajel2023）

blogspot.com）の「報告を希望される方へ」ページをご確認の上、記載されているフォームから必要事項を記入の上お申し込みください。なお、一般参加に関しては後日別途案内いたします。

1. 個別研究報告の申し込み

個別報告を希望される方は、ポータルサイトの「報告を希望される方へ」ページ内「個別報告申し込みフォーム」バナーをクリックし、報告者の氏名と所属機関名、報告タイトル（欧文含む）、推薦する討論者候補などの必要事項を記入した上で「送信」をクリックしてください。報告要旨は200～250字（欧文100～120 words）としてください。個人発表には討論者がつきますので、希望する討論者の氏名（複数可）の入力にご協力ください。討論者への依頼と最終選定は大会実行委員会が行います。報告者、討論者ともに日本ラテンアメリカ学会の会員に限ります。なお、個別報告については対面での参加を前提とします。

2. パネルの申し込み

パネルでの参加希望も大いに歓迎します。パネルの代表者はポータルサイトの「報告を希望される方へ」のページ内「パネル申し込みフォーム」バナーをクリックし、パネル代表者の氏名と所属機関名、パネルのタイトルとその概要、および各報告者・討論者の氏名と所属機関、報告タイトル（欧文含む）などの必要事項を記入した上で「送信」をクリックしてください。パネル概要は400～600字（欧文200～300 words）を目安としてください。司会、報告者および討論者の人数や時間配分はパネル代表者の責任のもとで決定してください。パネルの持ち時間は120分です。司会者、報告者、討論者は原則として日本ラテンアメリカ学会会員とします。ただしパネルの趣旨にあ

い、構成上不可欠と判断される場合には非会員の参加も認められます。その場合には、非会員を加える理由をつけてお申し込みください。非会員の参加1名につき、代表者から1,000円をお支払いいただきます。また、海外在住者など対面での参加が困難な方の登壇がパネルの構成上不可欠と判断される場合には、対面とオンライン（Zoom）を併用したハイブリッド形式でパネルを開催することも可能です。ハイブリッド形式での開催を希望される場合には、フォーム内末尾の質問で「ハイブリッド形式を希望する」にチェックを入れた上で、対面での参加が困難な方の参加を必要とする理由の説明を記入してください。

3. 託児所の利用について

本大会では、大会会場内に大会参加者専用の託児室を開設します（専門業者に運営を委託）。報告の有無にかかわらず、大会に参加される本学会員は事前申し込みの上ご利用いただけますので、特に小さいお子さんがいらっしゃる会員は、ポータルサイトの「お子さん連れで参加される方へ」のページにて詳細をご確認の上、是非利用をご検討ください。なお、本学会会員の託児所利用のニーズを把握し、設置にかかる予算等の目処を付けるため、託児利用希望の事前調査を行います。お子さん連れでの参加を検討されている方は、大変ご面倒ではありますが、上記ページ内「託児利用希望の事前調査」バナーをクリックし、2023年1月14日（土）までにアンケートに回答してください。ご協力をお願いいたします。

【大会までのスケジュール】

- ・2023年1月14日（土）：報告申し込みの締切
- ・2月中旬：報告申し込みの採否通知
- ・3月31日（金）：当日配布用の報告要旨

締切日（書式等の詳細は追ってご連絡します）

- ・5月11日（木）：報告ペーパーの締切日（書式等の詳細は追ってご連絡します）

個別報告とパネルのいずれにおいても、報告者は事前に報告ペーパーを提出していただきます。ご提出いただいたペーパーは、第44回定期大会開催日をはさむ前後2週間程度、パスワードを設定した上でポータルサイトからアクセス可能な状態にする予定です。

多数の会員の皆さまの報告へのご応募、ならびに大会へのご参加をお待ちしております。大会の詳細につきましては、随時定期大会ポータルサイトや学会ニュースのメール配信でお知らせいたします。ポストコロナを見据えた大会にしたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【実行委員会連絡先】

〒168-8555 東京都杉並区永福1-9-1
明治大学和泉キャンパス研究棟
政治経済学部 武田和久研究室気付
日本ラテンアメリカ学会
第44回定期大会実行委員長 武田和久
メールアドレス：

ajeltaikai2023@gmail.com

ポータルサイト：

www.ajel2023.blogspot.com

3. 地域研究部会開催案内

〈東日本研究部会〉

東日本研究部会では下記の通り研究会を開催します。

【開催日時】

2022年12月3日（土）13:30～

【開催形態】

Zoomによるオンライン開催
プログラムの詳細および参加申し込み

については、学会ウェブサイトの「お知らせ」
ならびにメール配信でご確認ください。
Zoom招待URLは事前に参加希望をお伝え
いただいた会員にのみお知らせいたします。

東日本研究部会担当理事 上 英明
田村梨花
同運営委員 長村裕佳子

〈中部日本研究部会〉

2022年度第2回研究会

【開催日時】

2022年11月19日（土）13:30～17:00

【開催形態】

オンライン（Zoomミーティング）

【プログラム】

○第一報告：河村留利（愛知県立大学）

「カポエイラとウンバンダの世界観」

討論者：古谷嘉章（九州大学）

概要：ブラジルの格闘技・音楽・ダンスの
要素を持つカポエイラとアフリカ宗教や
先住民の信仰が混合し共生するブラジル
の宗教ウンバンダの相互関係を、今まで
のフィールドワークから研究報告する。
現在行っている岐阜県におけるウンバン
ダ儀礼の参与観察から、ウンバンダにお
ける神々や精霊の特徴に着目してカポエ
イラとウンバンダの共通点を分析し、両
者の世界観を考察する。

○第二報告：郷澤圭介（立教大学外国語教
育研究センター）

「ユカタン・マヤ人にとっての「敵」が意 味する存在とは：植民地初期と21世紀 における意味の比較研究」

討論者：井上幸孝（専修大学）

概要：メキシコ先住民族ユカタン・マヤ人
の母語ユカタン・マヤ語における「敵」
の概念について、植民地初期（16-17
世紀）に編纂されたスペイン語—ユカタ
ン・マヤ語の語彙集から収集された

「敵」を表す単語を言語学的に分析し、
彼ら固有の「敵」に対する概念の復元を
試みる。その後、ユカタン州フスク村周
辺で2022年8月に実施された村人へのイ
ンタビューにより得られたデータから現
代マヤ人が「敵」に対して持つイメージ
を整理し、400年以上前の「敵」の概念
が現在に至るまでにどのような経緯で変
化したかを考察する。

○第三報告：Arturo Mila（Universidad de
Santiago de Compostela博士課程/愛知県立
大学大学院）

「Polarización política, populismo y discursos antagónicos en América Latina: análisis de la primera vuelta a las elecciones presidenciales de Chile (2021), Colombia (2022) y Brasil (2022)」

討論者：菊池啓一（アジア経済研究所）

概要：近年のラテンアメリカ政治においてポ
ピュリズムの台頭が注目されている。本報
告では、2021～2022年に行われた3か国の
大統領選挙（第一ラウンド）における左派
と右派の代表的候補者に注目する。すなわ
ち、チリのGabriel Boric FontとJosé Antonio
Kast、コロンビアのGustavo PetroとRodolfo
Hernández、そしてブラジルのLuiz Inácio
Lula da SilvaとJair Bolsonaroである。左派
と右派それぞれの視点から見えるポピュリ
ズム共通の要素や、ラテンアメリカにおけ
る「新左派」「新右派」をめぐる議論につ
いても紹介したい。

中部日本研究部会担当理事 浅香幸枝
小池康弘
同運営委員 丹羽悦子

〈西日本研究部会〉

2022年度第2回研究会

【開催日時】

2022年11月26日（土）10:30～12:30

【開催形態】

オンライン（Zoom ミーティング）

【プログラム】

- 第一報告：若枝一憲（わかえだかずう）
（在クリチバ日本国総領事館・首席領事）

「第二次世界大戦時のブラジルの対日宣戦 布告の背景」

討論者：子安昭子会員（上智大学）

概要：1941年12月のパールハーバー攻撃を受け、ブラジル政府は翌年1月に米州外相会議を自国内で主催し、会議最終日の1月28日に中立政策を放棄し、枢軸国との国交断絶を決定した。その後、1942年8月31日に対独伊宣戦布告を行うが、対日宣戦布告を行ったのは1945年6月6日であり、米国の陣営参加の圧力を受け続けていた米州諸国の中で、最も遅く対日宣戦布告を行う国となった。当時のブラジル政府の意思決定については、日本側のみならずブラジル側でも十分な先行研究がなされていない。報告者は2017年12月に「第二次世界大戦期のポルトガル及びブラジルの中立政策の変遷と比較」と題目とする博士論文を執筆しており、今次発表では、右博士論文に基づき、かかるブラジル政府の意思決定に関して、外交史研究の立場から成果を報告するものである。

- 第二報告：Marcos Aurelio Guedes de Oliveira
（Universidade Federal de Pernambuco）

「Rise and Fall of South American Security and Defense Integration」

討論者：山岡加奈子会員
（アジア経済研究所）

概要：The end of the Cold War forced South America to adopt a strong policy of cooperation to survive the emerging international system. MERCOSUL resulted from cooperation between Brazil and

Argentina in order to consolidate democracy and to bring together South American countries toward economic growth. The Brazil-Argentina nuclear agreement represented a key step in this process. The SOUTH AMERICAN UNION represented a step forward to bring all regional nations towards a dialogue in development and security. The South American Defense Council was a first step to foster a dialogue among South American countries to protect themselves against an increasingly unpredicted world. The Brazilian vision of a multi-polar international system appeared to become a reality with BRICS. Nevertheless, the impact of a global dispute within UNASUL and between the US and China have led Brazil to abandon its regional project and led the region to a situation that might resemble the one during the Cold War.

西日本研究部会担当理事 宇佐見耕一
北條ゆかり
同運営委員 安保寛尚

4. 『ラテンアメリカ研究年報』第 44号の原稿締切時期の変更について

『ラテンアメリカ研究年報』の原稿締切時期について、第44号（2024年刊行予定）より9月末へ変更することが第173回理事会で承認されました。投稿を検討されている方はご注意ください。

なお、現在第43号（2023年7月刊行予定）に掲載する原稿を募集しております。締切は2022年12月15日（必着）です。ご応募をお待ちしております。

年報編集担当理事：奥田

5. 新刊書紹介

安村直己責任編集

『南北アメリカ大陸～17世紀』〈岩波講座世界歴史14〉

岩波書店、2022年、304頁。(紹介者：立岩礼子 京都外国語大学)

戦後の日本における歴史学の指針とも言える岩波講座世界歴史が第3期刊行を迎え、シリーズ始まって以来、初めて南北アメリカ大陸の名称がタイトルに現れ、独立した1冊として登場した。先住民をはじめ、この地に根を張った人々にスポットが当てられ、先スペイン期、征服期、植民地期を丁寧に解説し、南北アメリカ大陸史に対する認識をアップデートしている。

まず責任編集に名を連ねる安村直己氏が、「展望」として、この地域をどう理解すべきかを提示する。スペイン人到着時の先住民社会の類型モデル (p. 6) やスペイン人の探検・遠征のパターン (p. 18) を整理した上で、エスパニョーラ島、カリブ海、大陸と舞台を移しながら、コンキスタドーレスの動向を観察し、スペイン王室による植民地政策の試行錯誤を分析していく。そして数々の通説・定説に批判と修正を加え、先住民中心の歴史へと我々を導く。植民地支配下で主体的に生きてインディオやヨーロッパで覇権を失ったスペインや台頭するオランダやイギリスに目を配り、17世紀の解釈を方向付けようとする歴史家の使命が見える。

次に、この「展望」を受けて「問題群」が提示される。佐々木憲一氏による北アメリカの先史と関雄二氏によるアンデスとメソアメリカの文明は、前述の先住民社会の類型モデルを立体的に浮かび上がらせる。そして近年注目の先住民による征服論を踏まえ、大越翼氏がマヤ人の視点から、その生存の歴史を分析する。

続いて、先住民の運命を左右した事柄が「焦点」としてクローズアップされる。網野徹哉氏はキリスト教を受容したアンデスの先住民が司祭を訴える行動に出たことを切り口に、トレント会議と新大陸の布教に

ついて掘り下げ、横山和加子氏は新大陸においてスペイン人女性や先住民妻が果たした役割を第1, 2世代にわたって考察する。金井光太郎氏はオランダ、フランス、イギリスによる支配のもと先住民たちが変容する様を、大峰真理氏はスペインの関心が大陸に移った後の小アンティール諸島に入植したフランスの支配を詳説する。小原正氏は、スペイン支配下の先住民社会が一変することになったエンコミエンダ制について、名画「ラス・メニーナス」から紐解く。最後に、今回の岩波講座シリーズが目的として掲げる世界史と日本史の融合のトピックとして、清水有子氏がスペインと徳川幕府の通商関係を論じている。

コラムでは、川田玲子氏がフェリペ・デ・ヘスス崇敬、佐藤正樹氏がスペイン帝国の文書ネットワーク、菅谷成子氏がフィリピン統治、細川道久氏がカナダ進出、鈴木茂氏がポルトガル帝国の植民地経営を解説し、本書を完成させている。

The Cambridge History of Latin America (ケンブリッジ大学出版、1982年) や *Historia General de España y América* (Rialp社、1992年) *Historia General de América Latina* (UNESCO、1999年) もやはり古くなった感は否めず、ジョン・リンチ、バルトロメ・ベナサル、ジョン・エリオット、レオン・ポルティエリャ、ロペス・アウスティンと名だたる歴史家も鬼籍に入った今、21世紀にふさわしい歴史解説書はまだない。そうした中、本書はまさに日本を代表する当該地域の専門家による歴史研究のレベルの高さ、とりわけ責任編集者の安村氏の歴史学者としての見識の高さを知らしめる一冊となっている。もちろん、本書と合わせて、シリーズの第1巻「世界史とは何か」と20世紀を扱う諸巻にも目を通すことをお勧めする。

牛島万

『米墨戦争とメキシコの開戦決定過程——アメリカ膨張主義とメキシコ軍閥間抗争』
彩流社、2022年、290+74頁。(紹介者：佐藤勸治 獨協大学)

ロシアによるウクライナ侵攻とその戦況が連日伝えられている。本書は、大国による隣接地・係争地の領土争奪戦を考えるうえで時宜にかなった刊行となった。開戦後の経過は大きく違うが、米墨戦争から二百年近くたった現代においても大国による領土争奪戦が繰り返されていることをまず確認したい。

本書は、米墨戦争について、勃発の要因を米国膨張主義と捉えることに異論はないとしたうえで、テキサス分離独立を含めたメキシコ側の独立後の政治過程、とくにパレデス大統領が開戦を宣言する「直接的要因」を詳細に分析した研究書である。パレデスは、係争地への米軍侵攻を理由に「自衛戦争」を1846年4月に宣言した。その二日後、係争地においてメキシコ側から先制攻撃が行われた。著者は、「戦力や財政上の理由から、戦勝の見込みがほぼ皆無であるばかりでなく、その敗北による多大な代償を考えた場合、メキシコの政策決定者や軍は、どうして『負ける戦』に挑まなければならなかったのか、しかも、それがどうしてメキシコからの先制攻撃でなければならなかったのか」と問うている(11頁)。

著者は、上記の問について、開戦を求める世論のほか、頻繁な政権交替に帰結する独立後から開戦時までの軍閥を含めた党派間抗争、なかでもパレデス取り巻きの主戦派軍人トルネルらの役割を重視している。パレデスが政権についたときが、開戦に向かう「復帰不能地点」だと指摘する。さらに、開戦決定が軍人であるパレデスらの「名誉」を重んじた無分別な判断だとする従来の見方を批判的に検討し、合理的決断であったと結論付ける。パレデスは、短期決戦であればメキシコ勝利の可能性があり、またイギリスからの援助や他国の仲裁が得られると判断していたとする(282頁)。

実際、米国の勝利は容易ではなかった。メキシコ市陥落が開戦から1年5ヶ月後という長期戦であったことをみれば、開戦を単にメキシコ軍部の「名誉」問題に矮小化してはならないだろう。米軍側の人的被害

も甚大だった。大半が疫病によるものだったが、死者数は1万3,000人に上っている。一方、ある推定では、メキシコ側の死者数は低く見積もっても米軍側の2倍、2万5,000人ほどであった。著者によれば、開戦の直接的要因の詳細な検討は行われてこなかった。短期決戦による勝利の可能性に賭けたという考えは、日本軍の対米開戦をも想起させ、説得力があるように思える。

本書は、20年以上にわたり著者が発表してきた論文を基にした博士論文(京都外国語大学)をさらに加筆修正したものである。著者はテキサス独立に関する単著を2017年に公刊している(*)。本書の出版によって、独立から1846年にかけての米国・メキシコ関係史が領土をめぐるメキシコの政治状況を中心に詳細に知ることができるようになった。著者の長年にわたる一貫した研究姿勢と研究活動の成果である。

米墨戦争は、「総力戦」以前の戦争である。メキシコ領土内に侵攻した米軍兵士(義勇兵も含める)と住民の間には、戦闘だけでなく多様な人的交流があった。米軍への抵抗があったとは言え、この時期のメキシコ人の国民意識、対米意識を20世紀以降の基準で考えることはできない。例えば、米軍は進軍先で地元から物資調達が可能だった。また、メキシコ市に向かうスコット隊は途中プエブラ市に抵抗を受けずに滞在できた。近年の米国での米墨戦争に関する研究状況を見ると、米国人の多様なメキシコ体験を発掘している。なかには、米国兵士の体験を観光体験として論じている研究もある。本書は開戦に至る政策決定過程を論じたものであるが、開戦後についても多様な観点からの研究を期待したい。

*牛島万『米墨戦争前夜のアラモ砦事件とテキサス分離独立——アメリカ膨張主義の序幕とメキシコ』明石書店、2017年。

ロドリゴ・フレサン
『ケンジントン公園』
内田兆史訳、白水社、2022年、494頁。(紹介者：石井登 小樽商科大学)

前世紀末から今世紀初頭の現代文学のテーマの一つに「越境」というキーワードがあったことを覚えておられる方も多いだろう。昨今翻訳で紹介されるラテンアメリカ文学の作品が描く舞台がラテンアメリカではないことは特徴的で、ある意味「越境」的な文学の在り方と言えよう。

著者のロドリゴ・フレサンは1963年にブエノスアイレスに生まれるが、十歳の頃にペロン政権下の秘密警察による誘拐を経験し、家族と共にベネズエラへ移住する。帰国後は学校ではなく図書館で読書に学び、雑誌や新聞などの記者の仕事を得る。短篇集『アルゼンチンの歴史』(1991年)で作家デビュー後、プラネタ社とトゥスケッツ社から四作品を上梓し、1999年にバルセロナへ移住する。この地でロベルト・ボラーニョと親交を結び、お互いの作品にお互いを描くほどだったことが訳者の内田兆史氏によって紹介されている。晩年をメキシコとロンドンの二重生活で過ごしたカルロス・フエンテスが同様の事柄を語っていたように、フレサンは「ものを書く」ためにカタルーニャのこの街へ移住したのだ。昨年、『ケルト人の夢』の訳書が出版されたマリオ・バルガス＝リョサもバルセロナに居を構えており、バルセロナの新聞『ラ・バンゲアルディア』紙にて「バルセロナが私を作家にした」と述べている。その他、ホルヘ・エドワーズ、セルヒオ・ピトル、ファン・ガブリエル・バスケスやサンティアゴ・ロンカグリオーロなど、時期や状況は違えどもバルセロナが、ラテンアメリカの作家たちを惹きつける土地であることが伺われる。この地を拠点にメキシコを舞台とする『マントラ』(2001)に続いて、本書『ケンジントン公園』(2003)を発表する。

主な舞台は大英帝国の首都ロンドンとなる。本編の中でラテンアメリカに関連する言葉や表現といえば、例えば愛と第三世界

の件(172頁)や「メキシカーナ」という言葉(198頁)、「エクアドル人ルイス・ポルタレス」という名前(313頁)くらいである。語りの形式としてはそれぞれに名前が付けられた、番号のない十一章からなるが、合わせて作品の謝辞と釈明、ポケット版への補遺(これらは恐らくフィクションではなく、もちろんラテンアメリカに関わる事柄も述べられる。その形式はボルヘスを思わせる。)が加えられている。『ピーター・パン』の作者、J・M・バリリーの生きる新歴史小説的なヴィクトリア朝の時代、語り手となるジム・ヤングの両親が生きていたポップ・カルチャーとブリティッシュ・インヴェイションの1960年代、そしてそれをケイコ・カイという人物に話して聞かせるジム・ヤングという三つの基本的な時間軸の構造となっており、いわゆる枠物語である。60年代の時間で主に見られる固有名詞の列挙などの語りは他の作品や時代性へと接続を容易にすると同時に、調べる読みの悦びを生む。具体的な場所を調べてみても面白い。例えばグロスター・ロード133番地(130頁)のヴィクトリア朝時代の家は実在し、ストリートビューでその佇まいを知ることができるし、カムデン・ヒル・スクエア23番地(340頁)は現在では詩人ジークフリード・サッサーンのブルー・プラーク(イギリスの史跡)となっている。著者の「よりよく知るために行かないことにした」(471頁)、調べられたロンドンを味わうことができる。

最後になるが、本書はポケット版(2005)からの翻訳で、著者が加筆修正したことが記されている。つまりヴァリアントが存在するのだ。文学研究者の立場から見ると宝の山のような本でもある。また著者が「我が英雄的な翻訳者たちを絶望の淵に追いやった」(476頁)と述べるように、本邦初訳作家の大作の労多き翻訳紹介を成し遂げた訳者を讃えたい。

リカルド・ピグリア
『燃やされた現ナマ』
大西亮訳、水声社、2022年、239頁。(紹介者：石井登 小樽商科大学)

本書『燃やされた現ナマ』(1997)は、『人工呼吸』(1980)に続く大西亮氏によるリカルド・エミリオ・ピグリア・レンシ(1940–2017)の翻訳書の第二弾である。ブエノス・アイレスで生まれた作者は、アルゼンチンや米国などを拠点に創作を行い、この他に『不在の都市』(1992)など三つの小説、『牢獄譚』(1967)など七つの短篇集、『批評とフィクション』(1986)など十一のエッセイ集の他、もう一方の名を用いた『エミリオ・レンシの日記』と題された記録を2015年から2017年にかけて三冊発表してきた。創作に影響を与えたというラプラタ大学でのアルゼンチン史の教育経験のほか、ブエノス・アイレス大学や米国プリンストン大学でもそれぞれ十年程勤務している。映画との関わりも深く、本書が映画化された『逃走のレクイエム』(2000)を含む6つの映画シナリオの制作に携わっている。主な文学賞としてはカサ・デ・ラス・アメリカス賞(1967)、ロムロ・ガジェゴス賞(2011)などのほか、フォルメントール文学賞を2015年に受賞している。この賞の受賞者はJ・L・ボルヘス(1961)、ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ(1967)、カルロス・フエンテス(2011)と錚々たる面々である。

アルゼンチンの文学で主な関心を引くのはラプラタ幻想文学と呼ばれる系譜だろう。ボルヘスやコルタサル、ピオイ＝カサーレス、シルビナ・オカンポなどの作品が知られる。一方でボルヘスの「薔薇色の街角の男」や「死者たち」のような暴力と宿命的な死のようなテーマもアルゼンチン文学らしさを持っている。ボルヘスの影響を少なからず受けた作家と評されるだけに、虚実入り混じったテキストは読む者に知識や理解力を問うだろう。前作、『人工呼吸』では、「命を危険にさらしてはじめて人は自由を守ることができる」とし、アルゼンチン紳士たちの紳士道が大量虐殺を引き起こしてい

たことが述べられているように、男たちの戦いや殺人もアルゼンチン史に刻まれており、文学の重要なテーマとなる。

本書は本編九章にエピローグと題された語り手による作品解説の二章の構成である。1965年9月から11月にかけて起こった実際の事件を元にしてしていると述べられるが、「現実に存在する材料に依拠しながら」(215頁)編まれた物語であることが示される。作品の中心人物となる〈ネネ〉ことブリニョーネ、〈金髪ガウチョ〉ことドルダ、グループを統括するマリート、〈クエルボ〉ことメルルスらの残忍な性質や放埒な生活についてのエピソードがインタビューなどを挟みながら、本編はドキュメンタリー風に語られる。彼らは警察や政治家も関わっているとされる五十万ドルの強奪を成功させるが、仲間への裏切りの後、ウルグアイへと逃亡する。そして読み進める中で彼らが犯罪へと導かれていった背景やネネやドルダの人間らしさなども知ることになる。マリートを除く犯人たちは隠れ家での銃撃戦から自暴自棄となり、共通の《価値》である「現ナマ」を燃やしてしまう。結果、彼らは群衆の憎悪の対象へと変化し、生き残ったドルダは制御不能の暴力の犠牲となり、愛について考えつつ事切れる。

共通価値への冒涇に対する群衆の反応は、ハンナ・アーレントの言う「悪の凡庸さ」に通じる暴力と読めるだろう。タイトルが『強奪』から『男同士』、そして『燃やされた現ナマ』へと変わったことが訳者によって紹介されているが、紙幣を燃やす行為から生じた、善悪の判断を欠く、群衆の「考えない暴力」として為される悪と犯人たちの悪との転倒がこの小説の主題の一つとなると言えるのではないだろうか。ただ犯罪を描いた小説ではなく、悪のあり方を示した本書は人間と悪の観点からも読み応えのある小説である。

